あなたを見つめてた

李正明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたを見つめてた

【Ｎコード】
Ｎ６１３４Ｉ

【作者名】
李正明

【あらすじ】
橋本健司は約３０年前、アメリカ留学中に付合っていた彼女を妊娠させ、尚かつ彼が原因で誤って彼女を階段から転落させてしまう。その事に責任を感じ続けている彼は現在トロントでサラリーマンをしているが、仕事の都合で日本に帰る事になった。その日本で思いがけない出会いが待っているのだった。

過去のあやまち

１９７９年９月

私は当時２０歳。父の経営する平和島のネジ工場は高度経済成長期が終わっても売り上げは落ちず、私たちの生活を潤してくれていた。私はその父が稼いだお金でニューヨークへと旅立った。父に無理を言い、当時としてはまだ珍しい海外留学をするためだった。

初めてする海外生活、初めてするホームステイでの他人との生活。ステイ先の娘、エミリーとは同い年で同じ大学に通っていた。私の英語の不自由さを気にする事無く、ランチを一緒に食べたり、学校帰りにニューヨークの街を案内してくれたりといつも私たちは一緒に居た。そんな私たちが深い関係になるのにそんなに時間はかからなかった。

１９７９年１２月１５日

エミリーは何か相談があると言って私を呼び出した。深刻な顔をして。

「健司の子供ができたみたい」

私は耳を疑った。まだ付き合いだして３ヶ月。ホームステイ先の娘と生徒という関係上セックスもそんなにしょっちゅうできる訳でもない。そんなにすぐに妊娠などする訳もないと思い、嘘だろと問いただすも、

「本当よ」

私はすぐさまその子を育てる事ができないと彼女に言い、部屋を出る。外に出て頭を冷やしたかった。すると彼女はすぐさま私を追

いかけ、階段の中腹で話を聞いてと言い私の右腕を掴む。それを振り払った瞬間、

キャー！！！！！！！！！！！！！！！

彼女は階段でバランスを崩し、私もそれに巻き込まれ私たちは階段から転落した。気がつくと彼女は私の横で倒れており、身動き一つとらなかった。

何事かと駆けつけた彼女の両親が救急車を呼び、私も付き添い、病院で彼女の両親に何が起きたのかと問いつめられたが、私はただ彼女が足を滑らせた抱けとしか説明出来ず、本当の理由を話さなかった、いや、話せなかった。

そして私は決心した。

日本に帰ろう。

１９７９年１２月１７日

私はニューヨークでの当面の生活費として持ってきたお金と紙切れを、まだ病院に居る主のいないエミリーの部屋に置いておいた。紙切れには、このお金を今回の入院費と子供を下ろす費用に充ててくれとだけ書いて。そして私は日本へ帰った。

その後、私はアルバイトをして貯めたお金と奨学金で日本の大学に入り直し、アメリカの留学費用を無駄にした負い目もあり、１９８５年４月に日本ではなくトロントの企業に就職。そこでしばらく

生活していた。

２００９年３月

４９歳になった私はトロントの商社で働いていた。ずっと独身のままだ。今までいい関係になった女性は何人かいた。彼女たちは今一歩踏み切れない私にいつも愛想を尽き私のもとを去っていった。その理由として、３０年前のエミリーへの負い目が未だにあるからだ。

そんなある日、会社から私への辞令が下った。

２００９年３月１０日、橋本健司に２００９年４月１日より東京支社勤務を命ずる。

日本に帰る事になったのだ。トロントに来てから数回しか日本に帰っていなかった。前回帰ったのは、３年前に母が亡くなって以来。それからロクに父とも連絡を取らず、今どうしているのか解らない。帰ったらまず実家を訪れ、父に会いにいこう。

介護士の女

２００９年４月

日本に帰ってきて5日が経った。私は実家のある平和島と会社がある新橋のちょうど中間距離にあたる大井町に部屋を借りた。築３０年の古いマンションでオートロックなど付いていないが、部屋はリフォーム済みでとても居心地の良い部屋だ。３月２９日までトロントで働き、４月１日からは東京で仕事。会社は私を殺そうとしているのか。そんなこんなで東京での初めての週末、私は父のいる実家へと向かう。

父は８０歳を過ぎてもまだネジ工場を閉めずに働いている。ここ最近の経済危機で経営はあまり良い状態とは言えず、絶世期には２０人程居た従業員も今では父ともう一人若い従業員が居るだけだ。

私が実家の前に到着すると、若い従業員が一人作業をしていた。私は彼に声をかける。

「親父居る？」

彼は突然話しかけられびっくりする。

「シゲさん、今タバコ買いに行ってるっすよ。待ってればそのうち帰ってきますよ」

私は待っている事にした。この若い従業員とは3年前の母の葬式で会ったが、その時はロクに話をしなかった。髪は金髪で細い眉毛。いかにも今時の若者と言う感じ（だと思う）。そういえば私は彼の名前を知らない。そんな彼と何を話せば良いのかと考えていると彼の方から話しかけてきた。

「健司さんでしたっけ？カナダに住んでるんっすよねぇ？すげーなぁ」

私もそれに話を合わせ、東京に転勤になった旨を伝えると、

「マジっすか！？すげぇー。もう超一流のサラリーマンじゃないっすかぁー。すげーなぁ。」
さっきからすげぇーばかり言っている気がする。
「え、じゃあカナダっつったら金髪のねーちゃんばっかっすよねぇー。うわぁーすげぇーなぇー」
誰かコイツを止めてくれ。そう思った時、
「すいませーん」
きれいな声の女性が工場を訪ねてきた。
「あのー、シゲさんは？」
男が再び父がタバコを買いにいってる旨を伝えると彼女は中で待っていると言う。
彼女は長い黒髪で目鼻立ちがはっきりしたエキゾチックな風貌のキレイな３０歳前後の女性。ハーフだろうか？私と目が合うと軽く会釈をし、男に私を見て「あのー？？？」と尋ねる。
「あー、この人健司さん。シゲさんの息子さん」
すると彼女は一瞬少し驚いた顔をするもすぐに普通の顔に戻り、自己紹介を始める。
「ナオミです。介護ボランティアで週末伺わせて頂いてます」
すると男がすかさず、
「そうそう、ナオミちゃん、キレイですよねぇー。週末だけと言わず毎日来てくださいって感じ？あ、そうそう、明日日曜だからナオミちゃん、一緒にどっか行かない？」
彼女が困っているとすかさず、
「コラー！タカヒロー！！何ナオミちゃん口説いてんだー！！」
父の怒鳴り声。相変わらず元気そうだ。すると父は私に気づき、
「おー、健司、久しぶりじゃないか」
元気そうにしている父を見て私は安心し、東京に転勤になったを伝え、何か困った事があったら連絡をするようにと私の携帯番号と住所を書いたメモ紙を置いてその場を去った。すると彼女が、
「あ、健司さん？？？」

私が振り返ると彼女は何か言いたげにではまたと言って父の身の回りの世話を始めた。

その後、私はナオミと言う女性の事が気になった。私が名乗ったあとの驚いた表情、別れ際の何か言いたげな様子。そして何よりもどこかで見た事がある顔のような気がしてならなかった。

そんなもやもや感を残しながらその夜自宅に居ると、玄関のブザーが鳴った。私がテレビモニターフォンで応答すると、そこには昼間実家で会ったナオミと言う女性。私はなぜ彼女がと言う疑問を抱きながら玄関のドアを開ける。そして彼女が放った一言。

「パパ？？？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6134i/

あなたを見つめてた

2010年10月11日21時12分発行